

太平洋戦争における主婦の体験

●善福寺一丁目

梁川 綾子

(大正八年生まれ)

昭和二〇年三月一〇日、本郷五丁目二五番の本籍地にて、親子四人で丸焼けにありました。

夕食後、子供たちも寝、二人ほんとに静かなひとときが過ぎたころ、又々(時もかまわずいつでも鳴る)空襲警報のサイレンがなり、毎度のように赤ん坊(長女)を背負い、身仕度を整え、防空壕に入ってしまった時、家の裏方の学校(昔は佐藤高女といった)に火の手が上がったので、主人から「中には危ない。前々から相談してあった手はずどおりに東大の校内に行くように」と言われ、長男(四歳)の手をひき、オムツ袋を手に通りに出た。その時には、もう行く手の道路にもヒューヒューと焼夷弾の音がきこえ、それがすぐ火を噴き、まわりに広がり、到底東大方面には、子供連れで逃げる事も出来ず、防空頭巾を被った誰かが「後樂園へ行くんだ」と叫んだ。

人々がかけて行く方に、ただ夢中で行って行った先が後樂園でした。途中、長男の靴の片方がぬげたが、あともどりしではかせる余裕もなく、ネンネコの懐に入れた弁当箱の大切

な食糧が落ちて拾う事も出来ませんでした。主人は後に残り、焼夷弾の消火に夢中で、そのうち家の中に何ともいえない風がぐるぐるまわり出し、それはこわいおもいをしたと後日話していました。

翌日、我が家の焼けあとに戻った時、蔵の地下に買いおいた炭の青い炎が高く立ちのぼっており、食糧も真黒こげ、口に入れても炭になった米は、とうてい食べられる代物でもなく、洋服は織目そのままの灰になっていました。

後に知りましたが、昭和二〇年三月一〇日午前零時、百何機のB29が木材、竹、紙で出来ている日本家屋を焼き尽そうと焼夷弾の絨緞爆撃を行ったのだそうですが、お隣の防空壕では御夫婦が亡くなっておられたと伺い、身がちぢむ思いで御冥福を祈るばかりでした。夜空にB29の青く、赤く、銀色に光り、綺麗な巨体の飛行機がユウユウとび、下から高射砲の撃つ様子も分かりましたが、届くこともなく、何が起きているのか何も判らず、こわいことも忘れ、空を見上げていました。

後樂園に一旦落着いても主人とも会えず、朝方に空襲警報も解除になって、背中の赤ん坊も母乳の時間となり泣き出し、軒先に腰をおろした時、その家のGさんという家のみず知らずの方々が、「中に入って休みなさい」といってご親切にして頂き、当時食糧不足なのに朝食まで御馳走になり、本当に親切にしていただき暖かく迎えられ、今でもその嬉しかった事が忘れられません。

その方の本当の消息が気になっております（戦後主人が方々手をつくし、さがし当てたと喜んで長男と伺ったのですが、先方様には何のおぼえもないと話が合いませんのでがっかりして戻りました）。

敵の爆撃機が真つ昼間から我々の頭上に襲いかかり、空襲に怯え、家は厳重な灯火管制の闇の中、窓には黒い布、紙で明りのもれないように、その上、電灯には黒布でカバーをし、服装は日常も寝る時もモンペ（和服を縫い直した）姿で、ゆっくりした気分で床に入るなど考えられない状態で、食べ物と配給制度で、食べたい物が食べられる今の若い方々には、想像も出来ない生活でした。

勝てる信じ、勝つまではと、すべて我慢の生活、それが当然とおもうし、少しの不満もいわないで、贅沢は敵と言いつて不自由の生活にも辛抱が出来ました。

主人とも隣組の方たちのお陰で落ち合う事が出来、一時新大久保の叔母の家に世話になりましたが、ここもいつ空襲されるかわからない、子供連れでは危ないからと阿佐ヶ谷六丁

目の私の実家に行こうと考えましたが、そこも強制疎開（延焼防止の火除地とするため建物を取り壊すこと）で、急ぎよ長野に疎開しました。

そこに出征した義兄の残った姉に姪、私も子供二人と合計九人の家族が、当時いくら疎開奨励されても縁故者のある人はまだよいが、我々のように勤め人の家族が急に農家の仕事といつてもおもうにまかせず、衣服の売り食いの竹の子生活でした。

疎開の実態は、親子といえども根本的に食糧が不足している故に辛く悲しいもので、今思い出しても胸がいたみます。田舎でも地域全体の食糧が必要量を下回っていて、その上親兄弟を兵隊にとられ、そこに疎開者が多勢来て東京で贅沢してた者がと何につけ白眼視されても、敗戦という事でどうしようもなかったのでしょうか。お金があってもなんにもならない、物の時代で仕方のないことでした。闇市などがあって、みんなこすすっからくて、お腹をへらしていて、という時代でした。

兄弟始め親戚の若い働き手は皆、当時は赤紙一枚で召集され、長男が産まれて三か月目には、主人は二回目の出征となり、独身時代は中支に、二回目は満州でしたが、この時には隣近所、婦人会等の見送りは一切禁止で、それでも年寄りの叔父が渋谷からかけつけて下さり、長男と三人だけの淋しい見送りでした。留守家族も電話もなく、母子で皆勝つまではと歯をくいしばった生活でした。

可愛い子供も学童疎開が促進され、三年生以上の小学生は東京から皆両親の元を離れ、辺ぴな山の中で両親を恋し夜毎泣いたと、妹も一時疎開していた時の話を聞き、身にこたえました。

主人にも三回目の赤紙が八月来て千葉の四街道の隊に入ることになってましたが、八月一五日の終戦の日、自分で破り捨てたとのことです。

親戚関係は皆、無事に復員し、なんと運がいいのでしょうか。しかし皆、家は焼かれ、お互いに住居には一苦労も二苦労もし、私共も一時会社の寮に入れて頂き亀有でも半年ばかり生活し、昭和二二年に今の善福寺に落ちつきました。もう住みついて四五年の年月が過ぎました。おもえば長い年月、次から次に色々な事があり色々な境遇にあつたがそれも今では夢のよう。現在この年になって、この幸がいつまでもつづくように願ひ、戦争だけは決してしてはならない、話し合う人々であつてと、祈らずにはられません。



昭和十三年第二次
東部防空訓練東京市訓練實施計畫

第一 訓練ノ目的

主トシテ燒夷彈攻撃ニ對スル防空機關ノ活動ヲ訓練シ且ツ本市ニ於ケル防空施設及防空組織ノ強化促進ト精神訓練ノ徹底ヲ圖リ併セテ第一次訓練ノ經驗ニ鑑ミ灯火管制ノ徹底ヲ期スルニ在リ
尙本市防護團訓練大綱ニ依ル聯合防護團連合演習ヲ併セ行フ本年度連合演習ハ時局益々重大化シ其ノ推移全ク豫斷ヲ許サル現況ニ鑑ミ何時空襲ヲ受クルモ現在ノ施設資材ヲ巧ニ活用シ以テ其ノ慘禍ヲ最少限度ニ局限スル如ク實際ニ即應スル最モ眞剣ナル訓練ヲ行ハントスルニ在リ

第二 主要研究訓練事項

第二次東部防空訓練ノ本市ニ於ケル主要研究訓練事項左ノ如シ

- 一、家庭防火群ノ訓練ト組織強化
 - 二、防護團防火班ノ消防訓練
 - 三、エレクトロン、黃燐、油脂等各種燒夷彈ニ對スル消火法ノ研究
 - 四、毒瓦斯下ニ於ケル消防訓練
 - 五、消防ニ關係アル防護監視警報通信ノ研究
 - 六、燒夷彈攻撃ニ對スル防空機關ノ組織運用ヲ目的トスル圖上又ハ現地研究
 - 七、灯火管制要領ノ指導徹底
 - 八、空襲下ニ於ケル待避訓練
 - 九、警報ノ受領及傳達ノ訓練
 - 十、主トシテ燒夷彈攻撃ヲ受ケタル場合ノ綜合訓練
 - 十一、防空上ノ精神訓練
- 本市連合演習ノ主要訓練事項左ノ如シ

私の生活信条を決めた「空襲」

● 浜田山一丁目

横井 時燁

(昭和六年生まれ)

「中部軍管区情報／東海全地区空襲警報発令。敵編隊は現在尾鷲上空を名古屋方面に北上中。なお後続目標は尾鷲南方洋上を北上中なり」

毎夜、ラジオから流れるこの言葉に私たちはもう慣れてしまっていた。

昭和二〇年。当時、中学二年であった私は、父と母とともに、静岡県の中泉町（現磐田市）に疎開していた。中泉は、浜松市の東一〇キロの所にあり、名古屋や浜松を爆撃した敵機が帰る（当時は遁走と呼んでいた）コースに当たっていた。従って、敵機が頭上を通っても空襲を受けることは滅多になかった。

しかし、三月のある日、家の近くにも焼夷弾が落とされ、数十軒の家が火災にあった。火は直ぐ隣の家にまで及んだが、私の家はかなり高い石の塀に囲まれていたため、幸い類焼をまぬがれた。私の家はかなり広かったため、その空襲で被災した一組の家族が、私の家の二階に同居することとなった。

四月の二七日、登校する間もなく警戒警報が出され、私は

いつものように授業がなくなったことを喜んで我が家に戻った。家に着くと、直ぐに空襲警報に変わった。我が家では、そのころは度重なる空襲警報に慣れてしまったためと、父が持病の喘息で寝たり起きたりの毎日であったため、庭に小さな防空壕があるにもかかわらず、避難しないで家の中にいる習慣になってしまっていた。私たちは、部屋でじっとしてラジオの空襲の情報を聞いていた。遠くでドーンという爆弾の落ちる音が、これまでにない響きで聞こえてきた。

「逃げようか」

珍しく父親が、弱気の声で言った。

「そうしましょう」

母親も同意した。私たちは、防空頭巾を被り、ちよつとした非常品を持って家を出た。

「逃げますよ」

家を出る時、母が二階にいる同居の人に声をかけた。

「はい。私の方も庭に出ます」

二階から声が出たので、私たちはそのまま家を後にした。

なぜか分からないが、その時は防空壕のある庭に行かず、私たちは家から五〇メートル程離れた所にある倉庫の蔭に身を潜めた。「ドドーン」直ぐ近くで、猛烈な爆弾の炸裂した音が続けざまに起こった。私は、学校で教わったように、親指で耳を抑え、四本の指で目を覆って地面に伏せの格好をとった。寝ている私の体全体が物凄い音響とともに地響きで揺れる感じがした。それがどの位続いたのか、全く覚えていない。「怖い」という感覚だけで、後は何も覚えていない。生きた心地がしないというのは、このことを言うのであろう。

辺りが急に静かになった。直ぐ脇で、何か異様な声が聞こえてくる。見ると、父の体が瓦で半分埋まっている。倉庫の瓦が爆弾による爆風のため落ちてきたらしい。

「もう駄目だよ」

もともと半病人で気弱な父は、顔を横に向けたまま悲痛な声を出している。

「何言ってるのよ」

母はそう言うと、立ち上がって父の体にかかった瓦を一枚ずつどかしかかった。気がつくとも、私の腿ももから足の上にも数枚の瓦が落ちていた。私はそれを取ろうとして、自分の手の甲から血が出ているのに気がついた。落ちてきた瓦にあたったのだろう。

「瓦が途中にあるひさしに当たってから落ちたんで助かったんだわ。まともに落ちて当たったら危なかったわ。よかった」母は、そんなことを言いながら、父の体を埋めていた瓦を

全部取り除いた。

空襲がおさまる倉庫の蔭から出た私は、一瞬間と立ちつくした。そこにはあの立派だった私の家の建物の影は消え失せて、見えたのは無残に破壊された瓦礫がれきの残骸だけであった。父は棒立ちのまま声も出さず、母はいつのまにか目に涙を浮かべていた。爆弾は、我が家の建物に一発、庭に一発落ちたようだ。

私たちが逃げた倉庫と我が家の間にある一軒の家も直撃で潰れていた。しばらくすると、その家で死んだ人がいるようだ。消防団が掘り返し始めた。見ていると、女性の死骸が掘りおこされた。防空頭巾を被り非常袋をしっかりと握りしめたままで土の中から掘り出されたその女性の土色の顔は忘れられない。二階に同居していた奥さんと赤ん坊の死骸はうちの庭で見つかったが、小さな肉の塊だけで原形は全くなかった。犬が赤ちゃんの腕をくわえて歩いているのを見たという人がいた。

戦時中のため、家が空襲で壊されたという悔しさはさ程感じなかった。もちろん、空襲の恐ろしさは身をもって経験したが、現在の私にもっとも影響を与えたのは、運命ということである。もしもあの時いつものように家にいたら、もしもあの時庭に逃げていたら、そう思うと、今でも空恐ろしい。私は、その時以来、運命論者になってしまった。

戦災を受けて

●高円寺南三丁目

渡 イツ

(大正三年生まれ)

太平洋戦争がきびしくなり、銃後の守りは隣組の一致団結「ほしがりません勝つまでは」を標語にバケツリレー、火たきを水に浸し梯子はしごに登って消火練習。戦時報国債券、大東亜戦争割引国庫債券が割当てられ、食糧は配給制度に、衣料は切符制度に。学生は学徒勤労令が布かれ、聖戦の名のもと一億一心必勝の信念に燃えた。昭和一九年長女一五歳、次女一四歳ともに挺身隊として職場に通っていた。夫は東京が空襲を受けるものと二年の三女、一年の長男とも学童疎開をさせず手許においた。

一二月四日、日本無線に動員されていた次女が疲れた様子で帰った。熱があるので翌日先生に診て戴く。内科に異常はないから外科へと添書を下さる。食欲も無い娘は、妊産婦用に(私の)配給された少しの蜜柑みかんを美味しそうに食べた。職人さんに背負って貰い、S外科病院に行く。病名は Deng 熱ではとはっきりしないまま入院となる。その夜空襲警報がなった。待避せずベットにいて下さいという。真暗になった一人部屋に娘の手を握り、苦しい息づかいをききながら時を

過した。夜中に苦しがり、看護婦さんは注射二本打った。娘はそのまま眠りつづけ、夜明けとともに警報は解除され、カーテンを引くと朝の光が差し込む。娘は：娘の顔は見る影もなく赤い斑点が出来、亡き母親そっくりに老けて見えた。院長の回診で敗血症、時間の問題ですと言う。なんと……。果然となる気を奮立たせ夫に来て貰う。相談して寝台車で家につれて帰る。ちょうど友人たちの見舞を受けるが、意識が薄れきれいな花が一面咲いているとか、皆さんさようならさようならとか、永い別れとなったのは八時だった。恭子ちゃん御免ね。面疗めんりょうが内向したのが後でわかった。

あわただしく昭和一九年は暮れ、同二〇年を迎える。西の方から東の方へ我々の頭上を通るB29の編隊は、日増しに烈しくなった。ある日隣組の若い軍人さん宅に大きなトラックが来てアツという間に空家になった時は驚いた。三月一〇日未明の空襲は、東の方が薄赤く見えた。夫は何もいわず自転車で出かけた。浅草言問橋方面に行ってその惨状を見て来たのである。死人の山だと言。私共の家の敷地は一〇〇坪位

あった。夫の姿が見えなくなつて前の庭から赤い土がポーンポーンと上に飛んでいるのがみえた。ちよつど防空壕を掘つていたのである。私は六月が出産予定になつていたので。故郷の北海道への疎開を考えたが許可されない。長野県諏訪の友人からすぐ来るように親切な手紙を貰つたが、二年、一年、四歳と妊娠七か月の身重。荷物は制限され汽車の切符は：汽車には窓から入る状態になつた。親切な手紙をもらいながらついに疎開する事が出来なかつた。

夫の掘つた防空壕は六畳位の広さで出産できるようベットが作られ、出入口は梯子段になり鉄板で閉じられ、鎖を引張ると開くようになっていた。五月二五日未明の空襲は一面火の海となつた。約束はどこかへ消え一六歳の長女に三年、一年、四歳の末娘三人を託し焼跡になつて空地向へ行くようにいい、私は燃え上がる火を叩き消し、さあ子供たちの方へと路に出るが、右も左も大きな火の海となつていた。リヤカーを引いた夫に会い、子供を空地へ逃がしたことを話して行つてもらふ。私が引くりヤカーは隣組の人たちの荷物で一杯になる。火の手のない方へ逃げながら私の頭は子供の事だけ。見上げると雨の降るように降ってくる焼夷弾、明るんだころ警報は解除になつた。重い足を引いて我家へと向かう。しかし見当たらない。一面の焼野原になつた。隣組の人たちは私の体を心配して声をかけてくれる。子供たちが夫と共に帰つたのは太陽が上つてからだつた。家は消失したが全員顔を合わすことが出来たのである。早速トタンで囲つた小屋を作つ

た。幸い隣組の方に二間借りる事が出来た。後で我が家の焼跡から焼夷弾の筒が一〇個も出て来た。見渡す限り焼野原となつた高円寺。駅のアナウンスの音が風に送られて聞えてくる。毎日B 29の編隊の来ない日は無くなつた。日本の飛行機が体当たりして落下傘が開いて来るのを泣きながら見た日もあつた。

さて私のお産は予定日を過ぎ六月二二日早朝より陣痛がおきた。お産婆さんにまだまだといわれながら夜一時五〇分女児を出産した。異常はなかつた。空襲警報が発令されても防空壕へ入る気力もない程、私は疲れ切つていた。ある日空襲警報のためバンバンと耳もさけるような音。死を覚悟していた私が、本能というのか乳児を胸に座布団で被い、裏口から防空壕へと走り出た。飛行機は私に向かつて急降下して来た。機上の兵隊が見えた。駄目だ。私は目の前の防空壕に入らず、子供を胸に抱いたまま地に伏した。どれ位経つたのか分からない。気がついた私たちは生きていたのだ。機銃を向けていたあの兵隊は子供を抱いている私を撃たなかつたのだ。私はそう信じた。飛行機は艦上機だつたとか、今でも昨日の事のように思ひ出す。五人の子供とともに生きる事が出来、八月一五日終戦の玉音放送をみんなで泣きながら聞いたのである。

散り散りに火中ほなかのがれて再びは相会う事なく昭和終わりぬ。